

清流とよがわの恩恵を流域全体で享受するために

～上下流交流から～

水循環・上下流交流グループ

鵜飼一之 笥 和美 宮瀬 勝、村瀬勇一 山内規雄 山田政俊 山本圭子



I はじめに

豊川が平成 15 年度に初めて「清流日本一」になった。しかし、その翌年には残念ながら「清流日本一」になれなかった。豊川流域は東三河の豊橋市、豊川市、新城市及び北設楽郡一円にまたがるよう広がり、河川流路の延長は 77km、流域面積は 724km²となっている。その後、昭和 43 年に全面通水した豊川用水によって、流域圏はさらに広がり、ほぼ東三河全域の市町村をカバーするまでになった。

豊川は、古くは昭和 44 年の台風 7 号による堤防の決壊、昭和 60 年のダム湖の枯渇、平成 6 年の大渇水など、時々大きな災害を住民生活に与えてきた。また、最近では設楽ダム計画に伴う環境アセスメントの問題から、川に対する関心は高まっている。

しかし、新城市で「いかだカーニバル」が開催されたこと。豊川の水を守るために「穂の国森づくりの会」「朝倉川育水フォーラム」等の NPO 法人が継続的に活動していること。また、国土交通省が平成 14 年度から始めた「とよがわ流域圏こども会議」の開催。これらのことをどのくらいの人たちが知っているか。

豊川用水によってもたらされる豊かな水は、温暖で大都市に近いという好条件から、下流域の渥美半島を全国有数の園芸地帯に、そして三河湾沿岸部を自動車関連産業の中心とする一大工業地帯へと発展させた。特に工業の発展は雇用を生み、周辺地域ばかりか全国から人々を集め、豊橋市をこの地方の中核都市へと飛躍する要因ともなった。

一方、下流域の繁栄とは反対に、上流域の山間部では基幹産業であった農業・林業が衰退し、多くの若者が村外へと働き場を求め流出した。山林は人口の減少及び担い手の高齢化により、手が入らず荒廃が進んだ。山林の疲弊は水不足や水質の汚濁の原因ばかりか、自然災害の危険性を増大させ、人々の生活にも重大な影響を及ぼしている。

II 流域の抱える課題

上流域の山間部では、林業を柱とする木材産業の陰り、湯谷温泉をはじめとする観光産業も他の地域との競争で苦しい状況にある。しかも、わが町にこれだという地場産業もなく、新規産業の育成は目に見えるまでになっていない。これら経済活動の低迷が、若者を中心とする働き手の流出を促し、町民の高齢化率を引き上げた。人口の減少と担い手の高齢化は、山林や農地などの地域資源の消失を早めている。さらには生活環境の悪化が集落（協同扶助の精神により築かれた共同体）の崩壊、村の衰退を促す結果となっている。

下流域の市部では、道路を中心とした交通網の整備、人口の増加・集中による自然環境破壊が進んでいる。その反対に、子どもが集まる公園や遊び場が減って、自然にふれる機会がなくなり、動植物との共生が難しくなっている。また、最近では水不足や空気汚染で生活環境はさらに悪化し、その対策に苦慮している。加えて都会ほどではないが、以前に比べ、人と人との絆が薄くなったことで、市民の安全をおびやかす出来事が増えて来ている。

III 上下流交流の現状

1 下流部の取り組み

上流部との様々な交流が行われており、田原市、豊橋市は広報による普及をはじめ、取り組みが活発である。全体的には、きららの森（段戸裏谷原生林）、水源地のある設楽町との交流に集中している。

田原市の上流域との関係は、昭和 57 年に愛知県を介し、津具村からの申し出により、昭和 58 年度に役場職員及び議会議員間での交流から始まった。田原市は分収育林事業を手始めに、津具村が整備したグリーンパーク内にふれあい館の建設、スポーツ交流、学校間交流、スタンプラリーなどの事業に取り組んできた。

平成 17 年に津具村が設楽町と合併したのを契機に、交流地域を広げ、利水受益地として上流域への理解、水源地域交流の色合いも強めている。

豊橋市は平成 7 年から、その前年に廃校となった旧神田小学校を山村交流施設「豊橋市神田ふれあいセンター」として利用できるよう整備した。また、同市ホームページに青少年・女性団体の野外活動や家族のふれあい等、様々な交流活動を紹介するなど、市民と地元設楽町との交流活動の推進に取り組んでいる。

蒲郡市漁協青年部が平成 14 年から始めた森づくり交流は、設楽町段戸山の穂の国みんなの森で、中部森林官営局、NPO 法人穂の国森づくりの会、蒲郡市役所などの協力のもと、漁民の森林づくり活動として続いている。平成 19 年は、漁協関係者 15 名のほか、三谷水産高校生 37 名も参加し、段戸山の裏谷原生林の観察会と併せて行われた。

2 上流部の取り組み

上流部からの取り組みは、各市町村が地域振興・過疎対策を目的に展開している。ほとんどの自治体では農山漁村滞在型余暇活動「グリーンツーリズム」施設をもち、広く都会から人を呼び、農作物の収穫、棚田での田植え、そば打ち、五平餅・こんにゃく作りなどの体験交流が行われている。

また、東栄町のななさとぐるーぷは平成 13 年度から「担い手農地情報活用事業」に取り組み、下流

表1 下流部自治体の上流部との交流事業一覧

市町村	新城市	設楽町	東栄町	豊根村	奥三河
田原市	鳳来町ふれあいフェスティバル	姉妹提携、議会議員交流、サマーフェア、学校間交流、弓道交流、剣道交流、ゲートボール、体験ツアー、スタンプラリー、水源地交流、分取育林契約、ふれあい館、三都橋地区交流			
豊橋市		小学生共同生活体験、中学生スポーツ交流、野外教育活動、ゲートボール、高齢者趣味の作品、女性交流、水源地巡り、豊橋神田ふれあいセンター	アクアフエスタ	アクアフエスタ、豊橋祭り	森林作業体験、豊橋祭物産展
豊川市		スポーツクラブ交流、野外活動、さららの里			おいでん祭り物産展、観光キャンペーン
(音羽町)	音羽まつり			音羽まつり	
(御津町)			山村都市交流、みなとまつり、東栄フェスタ		
小坂井町				文化交流	
蒲郡市	水源上下流地域見学	水源上下流地域見学、森林体験・したらの舞			蒲郡農林水産まつり

域の豊橋市、蒲郡市などからも参加者があって、18名となった。活動は遊休農地を利用したブルーベリー農園の造成、収穫体験などの参加型の交流となっている。その先には都会からの定年退職者を町内に呼び込み定住してもらうことも考えている。

その他に、東栄町、豊根村の各地集落で毎年冬季に行われる伝統芸能「花祭り」には都会からの多くの見学者が訪れ、地元の人々との交流の場となっている。

長期山村留学は昭和60年度から「とみやま交流センター」が主体となって始まった。小学1年生～中学1年生までの10人ほどの子どもが、大自然のなかで仲間と集団生活をしながら学校に通っている。また、平成7年度には新たに短期間の滞在もできる施設を豊根村にオープンさせるなど、新しい交流の輪の広がりも出ている。

IV 上下流交流の具体的な提案

上下流交流にとって、まずその必要性を訴えることが不可欠である。

そこで私たち「水循環・上下流交流グループ」は、とよがわ流域大学・流域圏講座での学習とグループ討論を重ね、具体的なプランを作成した。水循環・上下流交流を一体化することを目的とし、ゆくゆくは

表2 上流部自治体の下流部との交流事業一覧

市町村	交流施設・事業	事業内容	主な内容・範囲
新城市	山びこも丘 県民の森 ゆーゆーアリーナ つくで手作り村 こんたく長篠	野外活動教育 ふれあい創作教室 健康・体育 手作り工房	農作物の収穫、魚のつかみ取り 温泉プール 農産物直売所、大工・草木染め 鳳来牛
設楽町	神田ふれあいセンター 三都橋・豊邦交流センター 津具グリーンパーク アグリステーションなぐら分収育林・かがやきの森 四谷千枚田	ふれあい創作教室 ふれあい交流 野外活動教育 農村体験交流 きららの森、きららの里	自然探検 自然散策、魚釣り、キャンプ 農産物直売所、郷土料理
東栄町	スターフォレスト御園 千代姫荘 東栄温泉 花祭り会館	野外活動教育 農村体験交流 チェーンアート大会 花祭り	自然散策、天体観測 農作物の収穫、豆腐・五平餅 郷土芸能
豊根村	茶白山高原 国民休暇村 アグリリゾートやまびこ パルとよね 三沢高原いこいの里	スキー・リゾート 野外活動教育 農村体験交流	そば打ち、そばのオーナー 自然散策、魚釣り、キャンプ 山菜料理 豆腐・こんにゃく・五平餅

ひとつ一つの点が線になり、面となって「豊川の恩恵と地域の発展が流域全体で享受」できることを願って提案する。

1 目的別事業と実施内容

上下流の広域交流は自治体を中心に様々な取り組みが行われているが、流域全体を含めた取り組みは不足していると思える。そこで、交流の目的、内容、実施主体、実施内容、可能性や課題、効果についてまとめてみた。

これらの上下流交流事業のうち「森林を守るために」、「清流を守るために」という観点から、「豊川リバーウォーク」の具体的な提案を行う。

2 実践プランの目的と名称

『みんなで歩こう豊川』

- (1) 設楽町段戸山の水源から豊川河口までのおよそ80kmのコースを下る。堤防、側道を歩くことから何かを発見する。名称はそのまま「豊川リバーウォーク」とする。
- (2) 上流域で山林と水源の役割を学び、中間地点では河川からの利水施設、水循環について話を聞く。下流域ではさらに、ゴミ拾いなどの美化活動、水質調査、水辺散策を取り入れる。それぞれに案内人・市民団体がサポートしながら交流を深める。

表3 上下交流の目的別事業一覧及び内容

目的	事業種類	実施主体	実施内容	可能性・課題
森林を守るために	森づくり	行政 企業 市民	・自治体や企業で分収育林事業を展開する ・森林保全体験を通じての啓発	・田原市、蒲郡市ですでに分収育林事業を行っている ・穂の国森づくりの会始め各種団体が実践をしている
	山村体験	行政 学校 市民	・学校教育での山村交流の推進 ・豊根村富山地区で行われている山村留学事業の支援	・様々な野外活動施設が存在するが、必ずしもその存在が周知されていない ・長野県等遠方に行きやすい中学校の野外活動を身近な三河山間部誘導する
清流を守るために	清掃・水質監視	行政 企業 市民	・豊川の水質保全活動に行政と連携して、市民レベルで関われる活動を立ち上げる	・清流日本一という実感がない ・朝倉川、佐奈川など身近な河川での取り組みはあるが、豊川自体を対象にした取り組みが少ない
	水遊び・自然観察会・ウォーキング	市民	・市民が水に親しみ、とよがわを意識する機会をつくる ・すでに開催されている催しの支援	・東三河自然観察会などでとよがわを利用した自然観察会が営まれている ・いかだカーニバルなどの川を利用した催しがある ・案内人、スタッフの確保
文化を守るために	花祭りなど伝統芸能への参加・協賛	市民 企業	・地域の伝統文化に参加し、体感する ・伝統文化保存のためのPRを行う	・冬の夜間から早朝にかけて催されるため、個人としては参加する機会が乏しい
生きるために	農林産業活性化	行政 企業	・木サイクル事業の支援 ・地産地消の推進	・下流部自治体の公共施設で積み木ブロックや地元木材の積極的利用を呼びかける ・グリーン調達と同様な仕組みで地元産品の消費を推進
	観光資源の発掘	行政 市民	・広域観光・歴史文化グループの成果に期待	
	交通アクセスの改善	行政 企業 市民	・山間地域こそ道路整備が必要と訴える ・地域の交通財産である飯田線を補完する公共交通の確保が必要と訴える ・そのために、都市から山間部に流れる資金が必要と訴える	・地方には道路が不要というのは誤り、都市部の認識不足 ・山間部で人が生きるためには、生活と産業を支える道路が必要 ・自動車を自由に乗れない高齢者、学生のために公共交通機関が不可欠
	医療サービス・健康改善	行政 企業 市民	・広域医療体制の確保を訴える ・都市部並の保健サービスの提供を訴える	・人の健康・生死に関わる分野のサービス水準の低下は放って置けない

『豊川用水を溯る旅』

- (1) 渥美半島先端の初立ダムから新城大野頭首工までのおよそ90kmのコースを溯る。渥美の畑作地帯、温室団地を通過して歩く。名称は「水のウォークラリー」とする。
- (2) 先端のダム、貯水池で水量を測り、農業用水の利用状況を考える。中間地点では用水施設、水循環施設の見学をする。上流の水源地では豊川と豊川用水を結ぶ施設、導水施設について話を聞く。その他、工業・水道用水等に係わる利水について学び、河川・用水の価値、恩恵を皆で考える。

3 実践プランの作成指針

- ・リバーウォーク等は安全を最優先にコースを選択する。
- ・開催日時は秋季の連続する休日「体育の日もしくは秋分の日」を充てる。
- ・コースを4グループでつなく、半日「4時間」コースの組み合わせを工夫する。

- ・参加者の年齢と体力に合わせたコースづくりに努める。
- ・時間の有効活用のために電車・バスの利用を図る。
- ・「休憩のほか、遊ぶ・学ぶポイント」などの拠点を設ける。
- ・拠点地域では水質調査、水循環・生き物などの観察を行う。
- ・利水・用水施設、水循環施設等を見学する。
- ・集合・解散場所までの交通手段を確保する。

4 実行までのプロセス

年 度	具体的な行動	提案・よびかけ
初年度	ウォークロード選定の現地調査 類似するイベントから学ぶ、例えば「市民ウォークラリーのスタッフ体験等」 実践プラン「ウォークロードマップ」の作成及びプラン報告会の開催	豊川をフィールドとする各種市民団体との連携づくり、支援団体への呼びかけ 豊川リバーウォーク準備委員会の設立
2年度	案内人の育成とサポーター組織の構築 「森を育む会、自然観察会、水あそび会等」 準備委員によるプレリバーウォークの実施	関係市町村、任意組合へのはたらきかけ 「行政等団体からのバックアップ」 豊川リバーウォーク実行委員会の発足 実践プラン内容の決定 「日程・コース、人数、参加者募集期間等」
3年度	実践プラン内容説明会の開催 実行委員、市民団体メンバー及びサポーターを集めた説明会の開催 コース別リーダー研修会の実施 ウォークラリーの実施	参加者を募集 参加者の動向把握 活動の趣旨、運営方針と予算の確立

5 実行により期待できる成果

参加者は上流域の山林と水源を身近に感じ、上下流交流への関心が向くようになる。また、豊川沿いの道を部分的にでも歩くことで、河川・堤防等に対する問題意識を持つようになる。さらに、利水・用水施設を見学することによって、河川・用水の価値、恩恵について多くのことを学ぶ。遠くから見ていた川に身近にふれ、自然への関心と観察力を養い、何かを発見する。それが昔の架橋跡や、初めてみる自然現象や水辺の生物かも知れない。たくさんの人との交流を通して、河川の美化・保全活動の必要を学ぶ。さらに川で活動する市民団体が2日間にわたるイベントでつながり、連携の輪の拡大ができる。

6 開催に当たっての問題と課題

ウォークロード選定が大きな課題となる。(現地調査にかける労力と時間を必要最小限にとどめる。) さらにグループのメンバーだけでは知識不足なので、精通者の協力を必要とする。だが、その協力者集

めが最も苦勞する問題である。その対策は、計画を実行に移す段階から、参加協力団体及び支援団体への呼びかけが重要となってくる。また成功のカギとなるパンフ・ロードマップ作りも課題の一つに上がる。

2年目の課題は、案内人及びサポーターの組織化をどうするか。その後、実行委員会の立ち上げのためのメンバー集めであると考えている。

実行面では天気はもちろん、スタッフの人数、参加者の規模などの問題も考えられるが、このイベントが普及拡大し、工夫しながら継続実施されるためには、運営主体の確立・整備と予算確保が何より重要な課題である。

さらに、上下流交流の視点から、上流域を支え、上流域を中心に活動する組織と拠点センターを、近い将来立ち上げ整備することが求められてくるよう願っている。

V おわりに

豊川上流域（新城市以北）の林野率は80%以上と高く、山間を縫うように川が流れている。山の比較的なだらかな国道257号と、急な渓谷の間を通る国道151号の幹線道路沿いには、たくさんの家々が見える。しかし、その幹線道につながる県道の奥にも集落が点在している。

最近では幹線道路が整備されたことで生活の拠点を豊川下流域の市町に移し、たまの休みに帰郷するという不在住民も多くなっている。また、仕事と娯楽を求め、都市に移り住んだ人の中にも、上流域の現況をさびしく感じ、どうにかしたいと考えている人が少なからずいる。

とよがわ流域大学・流域圏講座で学んだ上流域の抱えている課題「人口の減少、高齢化から生ずる問題、山間地域集落の崩壊から村の衰退」をこの実践プランの目的「下流域と上流域の交流から学ぶ、下流域に住む市民の変化」からテーマ「清流豊川の恩恵を流域圏全体で享受する」に添い上流域での過疎化の防止、山林の保全が流域全体の持続可能な発展につながることをまとめとする。

最後に、上流域と下流域の交流は道路と河川を人工的に整備しながら続けられてきた。人工的なものは時々手を加えないと消えてしまう。上流域の山林を見ながら、ふと思ったことは「もったいない」という言葉であった。

参考とした図書

- ・「母なる豊川 流れの奇跡」 豊川改修60周年記念 建設省豊橋工事事務所
- ・「とよがわの川づくり」 国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所
- ・「ほい！これはええぞん東三河がまるわかり」 ポケット農林水産統計
- ・「東海農政局豊橋統計」 情報センター